

SPT educational 06

中町小学校「学習発表会」の記録



SPT educational 06

中町小学校「学習発表会」の記録

はじめのことば

生きることを学び合う場をつくる

中村麻美（世田谷パブリックシアター 劇場部 教育開発課）

世田谷パブリックシアターは、「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」という名称で世田谷区内の小中学校の授業の中で演劇ワークショップを行う活動を続けてきました。名前のお通り、世田谷区内の小中学校を“巡回”し、さまざまな学校、子どもたちに出会ってきました。今回の『SPT educational 06』で取り扱う世田谷区立中町小学校の事例は、その活動の中で生まれたものです。

中町小学校との出会いは、2008年のことでした。当時2年生の担任をされていた宮真由美先生から「学習発表会を一緒につくってほしい」というお話がありました。子どもたちが生活科の授業の中でつくった「生き物図鑑」を演劇ワークショップを通じて身体で表現させたいというのが先生からの提案でした。

学校というところにおける演劇というのは、台本がなければならぬ、セリフを覚えなければならぬ、大きな声を出さなければならぬ……という、“ねばならない”ことに縛られたものとして、先生方に受け止められている感があります。そのため、学芸会の練習のお手伝いとして、

つまり子どもたちが“うまく”舞台の上に立てるためのアドバイスを求めて、先生から私たちに声がかかることも少なくありません。しかし、宮先生はそのような“ねばならない”演劇のイメージに全くとらわれることなく、演劇をもっと広がりのあるものとして捉え、私たちに声をかけて下さいました。とはいえ、はじめから先生も私たちも互いを十分に理解し、信頼し合っていたわけではありません。私たちがどのようにワークショップを進めていくかを提案し、実施し、そして振り返るという実践の中で、演劇ワークショップの可能性を共に感じ、発見していきました。

昨今、学校教育を中心に、演劇または演劇ワークショップの活動がコミュニケーション教育に有効なツールとして注目されています。演劇というものが、劇場に足を運ぶ観客以外の人々に広まり、普遍的なものとして捉えられていく上では、コミュニケーション教育という観点で扱われるのも必要なことなのかもしれません。しかし、演劇ワークショップはそのようなコミュニケーション教育という名のもとに“うまく人と話せる”“うまく表現できる”といっ

た処世術を獲得させるための単なるツールでしかないのでしょうか。そのような貧弱なものなのでしょうか。私はそうではないと思っています。演劇ワークショップにおいて、“うまく”あることは必要ありません。むしろ“うまく〇〇”という言葉は敵かもしれません。私たち「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」は、“うまく”を取り外したところで人と話すこと、表現することを考えてきました。そしてそのことは、生活すること、成長すること、生きることを考えることにもつながっています。生きていくのに“うまく”あることは全く必要ありません。子どもたちが、“うまくなく”生活すること、成長すること、生きることを学び合う場を、演劇ワークショップを通じて実現化するべく、「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」は活動してきました。そのことを確かに証明できる事例が、宮先生とそして中町小学校の子どもたちと築いた今回ご紹介する活動だと思っています。

中町小学校での子どもたちとのエピソードは、今でも鮮明に頭の中に浮かびます。Aちゃんがはじめは会話すらし

てくれなかったのに、次第にカラダで表現することの楽しみを見出していったこと。常にグループからはみ出していくBくんをみんながとてもおらかな眼差しで支え続けていたこと。アイデアが溢れすぎてそのことをうまくみんなに伝えきれない自分に苛立つCちゃんの横顔。そこには、「学習発表会をつくった」という一言ではおさまりきれないもの、子どもたちが自分たちの手で足で着実に掴みとってきたもの、これから先に歩みを進めていくためになくてはならない糧のようなものが溢れていたように思います。その全てをこの本を通じてご紹介することは困難なことです。しかし、この活動を陰から支えてくださった校長先生や、そもそものきっかけをつくってくださった宮先生の言葉に目を通していただくことで、この本を読んでくださる皆様が中町小学校での子どもたちの姿を想像してくださることを期待しています。

世田谷パブリックシアターの方々と 共に作り上げた生きる力を育む授業

宮 眞由美 (前中町小学校教諭)

1 はじめに

私が初めて、世田谷パブリックシアターの方々が子どもたちを相手に授業を行っているのを見たのは、教科日本語の教科書作りで作業部会の一員として仕事をしている時であった。教科日本語の中に体で表現する活動を取り入れるため、既に先行授業を行っている学校を参観した。一人、二人、四人と人数を増やしていきながら、傘、椅子、花など、出されたテーマに沿って体で表現していた。それぞれがアイデアを出し合い、決められた時間の中で一つのものを作り上げ、できあがったものを見合っていた。笑いあり、驚きありで、違いや共通点に気付き、それぞれの表現を受け入れ、楽しんでいた。実に皆生き生きと楽しそうに活動していた。私もこのプロの方々と体で表現する活動をぜひやってみたいとその時強く感じた。

2 世田谷パブリックシアターの方々と3年間、 私が中町小で取り組んだこと

(1) 1年目—2年生(単学級)

4月、わたしは学校で唯一の単学級の担任となった。学校に配られた世田谷パブリックシアターのパンフレットを基に連絡を取った。生活科の「僕も私も生き物博士」という単元を中核に様々な教科を合科・関連付けながら体で表現する活動も組み入れることにした。そして、その発表の場を学習発表会にした。

合科—生活「僕も私も生き物博士」
国語「生き物不思議図鑑を作ろう」
体育「表現」
日本語「物語に出てくる人物を演じてみよう」

関連—国語「順序に気をつけて読もう—すみれとあり、

鳥の知恵」
道徳「生命尊重」
音楽「様子を思い浮かべよう」

町の様々な所で採集してきた生き物を飼育・観察し、それを図鑑として文章と絵で表し、同じ生き物を育てている仲間と共に飼育している生き物の様子や動き、変化の様子を体で表現した。また、みんなで飼育していたモルモットのえさの食べ方、動き等をグループごとに表現した。

<飼育観察し、表現した生き物>
ダンゴムシ、カタツムリ、モンシロチョウ、アゲハチョウ、ヤゴ(トンボ)、アリ、ザリガニ、キンギョ、メダカ、ヤモリ

(2) 2年目—1年生(2学級)

長い学校生活の第一歩である1年生。この1年生は、教科書、ランドセル、チョークなどの道具から、広い校舎や施設、集会や行事、掃除や係の仕事、そして教科学習や多くの人々との出会いなど、何から何まで初めてのことを経験する。その「初めて」を乗り越えながら1年生は大きく成長する。この人生で一番大切な時期に入学してからの「初めて」を振り返り、自分の成長を実感することで、今後の学校生活に自信と意欲をもてるのではないかと考えた。そこで、様々な「初めて」を「なかまちはじめて物語」として、学習発表会で発表し、その成長の喜びをみんなで共有したいと考えた。また、世田谷パブリックシアターの方のアイデアで教科日本語の中の詩「雨にもまけず」の群読に体で表現することも取り入れた。

合科—体育「表現」
日本語「いろいろなものになりきってみよう」

関連—国語「みぶりで話そう」
道徳「勤勉・努力」「愛校心」

<子供たちが選んだ初めて>
掃除—靴箱の掃除
学校探検の発見—校長室、保健室
生き物の世話—モルモット
生き物を飼った—アリ、ツマグロヒョウモンチョウ
校庭遊び—長縄
給食—配膳
運動会—かけっこ
勉強—机に座って勉強
アサガオを育てた—種から種まで

(3) 3年目—2年生(持ち上がり)

2年生の生活科の学習は地域での活動が基盤である。また、他の教科でも大勢の方々ととの交流がある。そこで、学習発表会を地域で学んだことを発表したりお世話になった方々への感謝の気持ちを伝えたりする機会としたいと考えた。

舞台の上では、地域の方々と共に活動した数々の出来事を呼び掛けと体で表現することにした。そして、フロアではグループごとに地域の公共施設のすばらしさとみんなにもっと使用してもらうための宣伝活動を大型パンフレットの前で体で表現し、自分たちが作成した小型パンフレットを配ることにした。

合科—生活「すてきですよ、中町は」
体育「表現」
日本語「物語に出てくる人物を演じてみよう」

関連—道徳「郷土愛」「尊敬・感謝」

<舞台上で表現した地域の方々との活動>

町探検での病院訪問 学校の畑で農家の方と野菜の植え付け 電車とバスの博物館行き

詩吟の先生と日本語の勉強 上野毛駅の探検

世田谷ファームで花の寄せ植え

世田谷パブリックシアターの方々との体で表現

幼稚園児に本の読み聞かせ 生き物探し

上野毛の畑で保護者と一緒に野菜作りとサツマイモ掘り

<宣伝活動した公共施設>

野毛公園 五島美術館 平和資料館 上野毛まちづくりセンター 尾山台図書館 深沢児童館

深沢図書館 玉川台児童館 玉川台図書館

森の児童館 玉中プール エコプラザ用賀

<学習発表会を参観した保護者の感想 … 原文通り>

Aさん……1年生の時と、あまりに大きく変わり成長したのだと実感させられた。素直なまっすぐさから「思考」と「工夫」が加わり、もはや大人並みの企画力すら感じられたほどだった。このことから人間は2年生くらいで大人並みになるのではないかと考えた。だとすれば指導する先生もよりよい仕事をしようとするほど、大変頭を使うことになり、エンドレスな感じになりそうだなあと想像した。子供たちは自由に言うことも好き勝手、発想の芽を見つけ育てるには創造力と判断力の高度なバランスが必要なので先生には頭が下がる思いです。うちの子は本当に楽しく準備していたのが印象的です。この「楽しく」というのが私にはなかった部分であり、そこにどこかうらやましさも感じるほどです。指導者の違いでここまで違うのか、学校の雰囲気の違いでここまで親も楽しめるのかかなり考えさせられました。「良い学校」という定義についてです。ありがとうございました。

Bさん……今回の学習発表会は、ショー的要素の体裁の整った

「大人（先生）が作った催し」ではなく、各生徒の素顔が肌で感じられる形式で実施されていたので、非常に好感が持てました。（各グループに分かれ、発表する等の工夫）。様々な個性、学習進度の異なる生徒を指導されることは大変さが増す中であるとは思いますが引き続きご指導をお願いいたします。

3 体で表現する活動を通して児童が成長したこと

○心を解放したC子さんを筆頭に、自分や友達のよさや違いに気づき、自信と意欲を高めることができた。

恥ずかしがり屋で友達とのコミュニケーションがとりにくいC子さんは、初めはみんなが世田谷パブリックシアターの方々と一緒に表現を楽しんでいる時も一人でロッカーの陰からその様子を覗いているだけであった。普段から関心はもっても自分に自信がもてないことに対しては一步を踏み出すことがなかなかできなかった。そのC子さんが初めて体で表現することに取り組めたのは、生き物の表現をする時だった。世田谷パブリックシアターの方の誘いに「自分の好きな生き物ならやれる」と言って、初めて参加した。動きがとてもリアルだったため、友達から大きな称賛を得た。そのことが自信を高めることにつながった。それからは、友達との表現を楽しめるようになり、2年生の1学期では、自分が飼った生き物の表現で大活躍でした。また、夏休みには教師の研修会の場に特別に参加し、みんなの前で演じたり、初めて会った人を含めての体で表現することを楽しんだりした。2学期の公共施設の学習では「私は今までリーダーをやったことがないから、やってみたい」と発言し、役割をきちんと果たせた。体で表現することは心を開放することにつながり、自信と意欲を高めた。このことは、他の児童にも共通したことである。

○思考力、企画力、判断力、表現力、コミュニケーション能力などを高めることができた。

上記の保護者の感想にもあるように、児童はこれらの力を楽しみながら高めていった。それは、共通体験した仲間と一緒に自分たちで考えて、自分たちで協力して一つのものを作り上げていくということが、児童にとってとても楽しい活動であったからだと考える。限られた時間の中で、何を、どのように表現すれば、見ている人に自分たちのしたことや気付いたこと、思ったことや考えたことが伝わるかを考え、紙に書いたり体で表現したりしながら、作り上げていた。時には意見が食い違い、なかなか前に進むことができないグループもあったが、自分の考えを相手に理解してもらえよう努力していた。最終的には、どの子供も納得できるようなものにまとめることができた。それは、共通体験をしたという裏付けがあることもあるが、体で表現することが視覚を通して相手の考えていることを理解でき、みんなが納得したものはより分かりやすい表現になるということを実感できたからだと考える。また、途中で、他のグループのものを見る機会を設けた。そして、よい点や修正点を伝え合う活動を取り入れた。このことも自分たちだけでは気付かないことに気付いたり、他のグループの表現のよさを自分たちのグループの演技に取り入れたりすることができ、表現力を高めることにつながった。

4 終わりに

平成8年7月の中央教育審議会答申では、「生きる力」を「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようとする自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など」と提言している。

子どもたちは学校という社会で、この力をはぐくんでいく。私がこの力をつけるために特に大事にしてきたことは、

一人一人が自分自身の可能性を信じ、自信と意欲をもてるようにすることである。そのためには集団の中で一人一人が輝き、主役となれるような場をできるだけ多く設定すること、互いに違いやよさを認め合えるような場をもつこと、どんな小さなことでも自分で考え判断・行動し、成功体験をもてるような活動を多く取り入れること、命（動植物の飼育・栽培）を育む活動を取り入れることである。

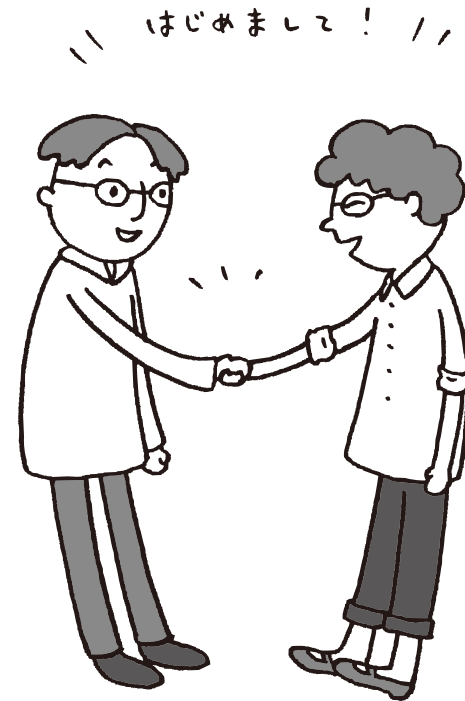
これらの力をつけるために、紙1枚から子どもたちが選んで決めるようにした。また、集団で活動する場合も一人一人が自らの考えで活動できるような場を取り入れ、成功体験をできるだけ増やすようにした。できた、わかった、という喜びは大きい。また、それを周りのものに認めてもらうことはもっと大きな喜びとなる。そして、それは自信となり意欲につながる。したがって、個人が輝いたものは全体に広げ、みんなでその感動や喜びを共有するようにした。そういう意味では、世田谷パブリックシアターの方々との活動は、わたしが大事にしてきたこととぴったり一致していた。子供たちは、友達と共に体で表現することで、自分の存在価値を実感し、互いのよさや違いを認識していくことができた。それが、自信と意欲につながっていった。

悲しいことに今の日本では年間3万人以上の方が自死するという実態がある。人が生きていくためには「衣、食、住」はもちろんのことであるが、自分の存在価値に気づき、自分の可能性を信じることができれば、このようなことは起きないのではないかとすると、とても残念である。

長い学校生活の第一歩である低学年の大切な時期に、このような貴重な体験ができた子どもたちは大変幸せであったと思うし、私自身も退職までの3年間をこのような活動を子どもたちと共にやることができ感謝の気持ちでいっぱいである。

学習発表会に向けたワークショップ

中町小学校とは4年間にわたって学習発表会に向けた活動を行ってきました。担任の先生、ワークショップ進行役・すずきこーたさん、劇場スタッフ、三者が協働して、演劇を通して子どもたちが何を体得し、何を表現していくのかを見守りながら活動を続けました。2008年から活動を始めていますが、ここでは敢えて2009年～2011年を取り上げてイラスト入りで紹介したいと思います。



@nakamachi elementary school

2008年

2年生担任の宮先生と初めて出会いました。学習発表会に向けて、2年生が生活科の授業でつくった生き物図鑑をカラダを使って表現するという活動を行いました。



2009年

宮先生が1年生を担当することになり、新たに出会った子どもたちと「1年生になってはじめて○○したこと」をテーマに、学習発表会の発表作品をつくっていきました。



2010年

2009年に1年生だった子どもたちが2年生になり、自分たちの住むまちについて調べ、そのことをオリジナルのパンフレットにまとめ、カラダで再現し学習発表会で発表しました。



2011年

3年生になった子どもたちと、「スーホの白い馬」という物語を劇化しました。今までとは違って、もともとある物語をベースとしましたが、シーンごとにオリジナルのセリフ・動きをつくりました。



私たちと
世田谷パブリックシアターの
3年間です！

start!>

2009年

学習発表会にむけて
「1年生はじめて物語」を
つくる



はじめましてー

ハイハイ



はじめましてー

進行役と子どもたちが、はじめて出会いました。



じゃあ次はねー...

バナナ!



バナナ

皮ごーす

身体を使って表現するシアターゲームなどを通して
進行役と子どもたちが、仲良くなっていきます。



椅子 机

漢字が覚えられてよかった!!

「1年生になってはじめて〇〇したこと」を選び出し、
身体で表現できるシーンにしてみました。

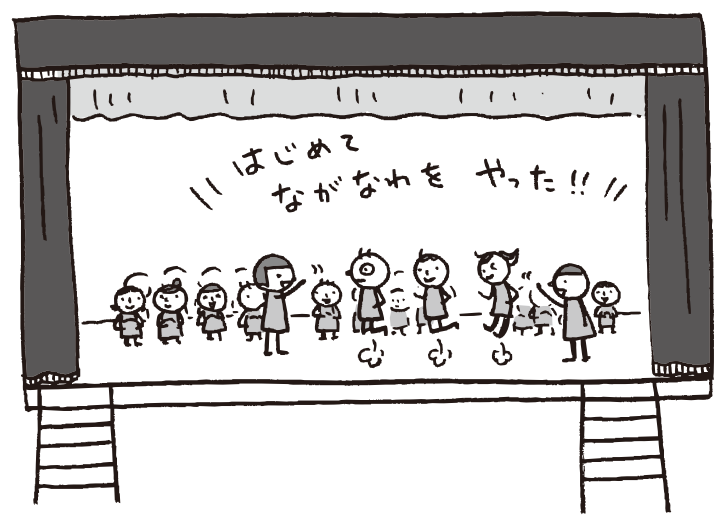
発表会で群読することになった
「雨二モマケズ」の練習もして...



つまらないから
ヤメロー!!

みぎってオカズ?

学習発表会当日には、体育館の
舞台上で発表しました。



はじめに
ながなわをやった!!

こーたのコメント

はじめは、こーたが来ると遊ぶ、
とだけ子どもたちは思っていたかも
しれません。実際「学習発表会」を
認識してもらうのに苦労しました。
でも遊んでいるうちに演劇になり、
相談したり意見を言ったりどう伝え
るかを考えたりと、生活するために
必要なことをドンドン発見・吸収し
ていきました。「声を大きく!」で
はなく「自分のお父さんお母さん
に、こんなこと出来たんだよ!」って
伝えるんだとだけ言いました。
しっかり伝わっていたようです。

2010年

7月：「生き物図鑑」を
身体で表現する



久しぶりにあったら、みんな大きくなっていました!

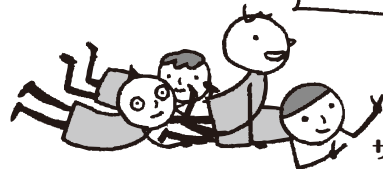


ダンゴ虫は
さわると丸くなります



ダンゴ虫

ザリガニは
触覚の間から
おしっこをします



ザリガニ

こどもたちが生活科で生き物を観察してつくった「生き物図鑑」を身体で表現してみました。

こーたのコメント

2008年の時に時間をかけてやった「生き物図鑑」をからだで表現することですが、なんとこの子たちは4時間（実際は3時間）でやってしまいました。表現も豊かになっていたように感じられました。継続は力なりと言うか、より短い時間で相談でき、伝えたいことを表現でき、また他のグループを楽しみながらも真剣に見ることが出来ました。教室での発表も、見ている人との距離が近くて良かったのだと思います。

9~11月：学習発表会にむけて
「素敵ですよ中町は」を
つくる

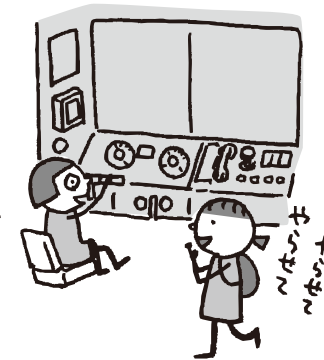


多くの公共施設取材することになるので、まずは、取材の訓練です。子ども達だけで切符を買い、電車に乗って、電車とバスの博物館へ行きました。



博物館では、自分で体験し、人の説明を聞き、質問をし、記録をとって、取材をしました。

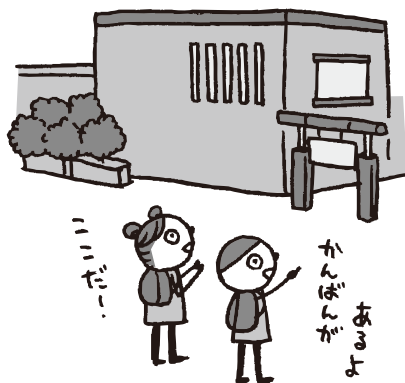
帰ってから、取材してきた体験の中から題材を選び、身体で表現してみました。



まちづくりセンター



児童館



いよいよ学習発表会にむけた内容作りです。グループに別れて、公共施設の取材にいきました。

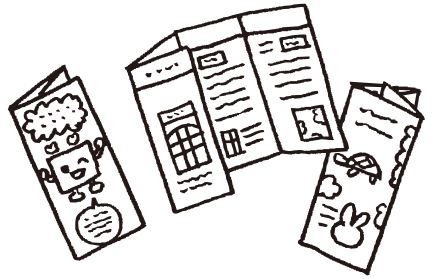
つづき



取材をもとに子ども達は工夫して...



このパンフレットの内容を、身体を使って表現する方法を考えていきます。インタビュー形式あり、歌とダンスあり、クイズ番組風ありと多彩です。本番に向けて練習を重ねます。



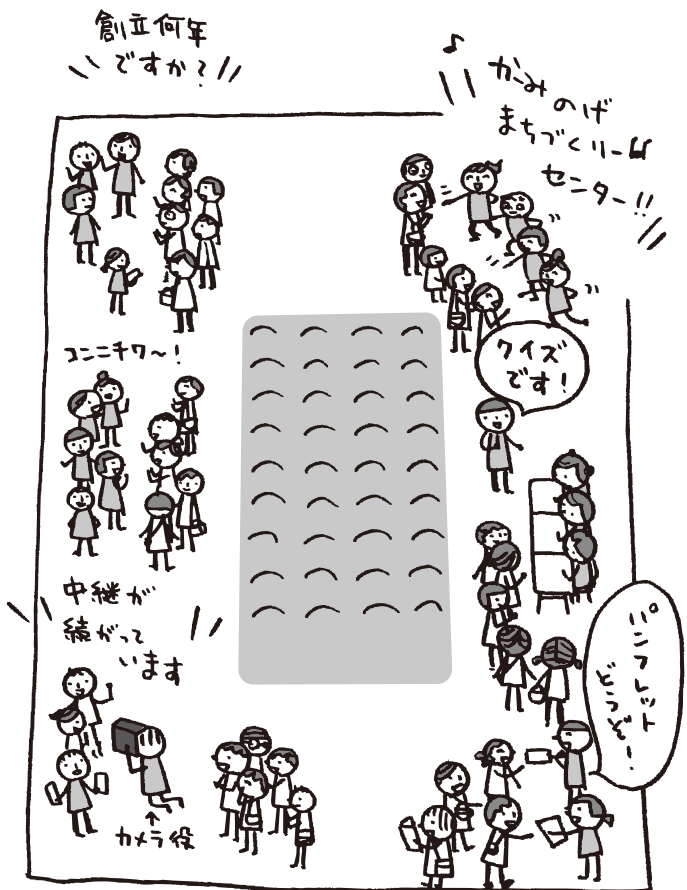
各施設のオリジナルパンフレットを作成しました。



いよいよ本番です！まずは体育館の舞台上で、おもちゃのチャチャチャの替え歌、「中町チャチャチャ」でプロローグ。

その後、グループごとにフロアにおいて、同時多発的に発表を行います。観客はそれぞれのパフォーマンスを見てまわるスタイルをとりました。

最後に再び舞台に上がり、「こんな町がいつまでもつくくように、ぼくたちはもっともっと勉強します！」と高らかに宣言しました。



こーたのコメント

子どもたちだけで電車に乗せること、施設見学に行かせ取材もさせて帰ってこさせること、それをさせる学校・先生・保護者の方々の勇気が凄いです。もちろん事故が起こらないようにバックアップは抜かりないのですが（こっそりついていとか）、「自分たちでやり遂げた！」という経験が演劇づくりにも生きています。このような演劇づくりは大人にも可能ですが、この時つくった演劇は、成長過程の子どもたちにしかつくりえない演劇かもしれません。

2011年



2011年は、「スーホの白い馬」を題材に表現してみました。進行役ははじめに「スーホの白い馬」の読み聞かせをしました。その後グループごとにシーンづくりを始めました。



大道具の馬のハリボテも、自分たちで作りしました。グループそれぞれが作ったシーンをつなぎ合わせ、担任の先生がギターで伴奏する合唱曲も加わり、3年生の発表する作品が完成しました。




番外編.1



セロ・ウアチパ

Cerro Huachipa (セロ・ウアチパ) は、私(すずきこ一)を含めた日本人と、在日外国人(主にはペルー人)で構成される演劇グループです。普段は日本に住む難しさや楽しさなどを演劇にしています。演目は「漂流者達(ナウフラゴス)」。無人島に流れ着いた日本人とペルー人の話です。全校集会の中で行われ、体育館中央で子ども達が劇を囲んで観ました。観させられる感じはなく、笑いながら真剣に、無人島の私たちにアドバイスしてくれる場面もありました。演劇と子どもたちが一体となった瞬間でした。

こ一たのコメント



クラス替えがあり、2クラスとも新しい先生に代わりました(私と初めて一緒に活動します)。3年生、「良い感じ」で悪ガキになってましたが「こうでなきゃ!」と私は思います。昨年までのように「良い子」ではいられず、出来るという自信からかぶさけてしまう場面も多く見られました。「もっと良いものができるのでは?」という思い(期待)はありましたが、特別なものではなく、身近なものとして演劇と接していると感じました(良い発表にはなったのですよ、念のため)。演劇を通して学んだことが様々な場面で良い影響を与えていると思います。

「震災直後の中町小学校」 すずきこ一た

2011年3月15日、私は子どもたちに招かれて中町小学校を訪れました。

中町小学校は、区立玉川中学校と同じ敷地内にあります。校舎や校庭は別々ですが、正門は一緒ですし、校舎も渡り廊下で繋がっているため、給食を一緒に食べる日があるなど他の学校より交流は盛んに行われているようです。そして、「中町ふれあいホール」という客席数200弱の発表会などをやるための小ホールが敷地内にあります。このホールは小学校や中学校のものではなく、世田谷区の公共施設です。学校体育館の奥にある舞台とは違い、照明や音響設備、客席などもとても充実した、しかも広すぎない良いホールです。

この「中町ふれあいホール」で、当時2年生だった子どもたちが、私を含めお世話になった方々への感謝の意味を込めて「ありがとうの会」を開いてくれました。それが震災直後の3月15日だったのです。

内容は大きくわけて2つ。1つは演劇です。「何をやりたい?」と先生が子どもたちに聞いたとき「演劇」と言ってくれたそうです。私としてはとても嬉しいことです。演目は「アレクサンダとぜんまいねずみ(レオ=レオーニ・作 谷川俊太郎・訳)」です。絵本をいくつかのパートに分け、それを担当するグループに分かれて工夫をして演劇をしていました。絵本を朗読する役の人とその通りに動く役の人のいるグループや、時々セリフのように役がしゃべったりするグループ、エプロンを着けぼうきを持ってネズミを追いかけてみたり、ゼンマイを自分で作って背中に着けたり、「キーキー」という効果音を口でやってみたり…。どれも私と一緒に活動したときのことが活かされています。そしてそれを私がいなくても自分たちのものとして演劇をつくりあげていたのです。

もう1つは、自分の得意なことや2年生になって出来るようになったことを披露すること。例えば、サッカーが得意な子はリフティングを見せてくれたり、コマ回し、縄跳び、キャッチボール、フラフープ、楽器演奏、作文朗読などなど、2~3人のグループから6人位のグループまで様々ですが、それぞれ得意なことを披露してくれました。舞台の上で緊張してかいつものように上手くできない子どももいましたが、「おいしい!」「がんばれ!」と友だちから声を掛けられ、何度も繰り返して出て来た子もいました。

震災直後のこの時期、電力消費のことや気持ちの問題として、「ありがとうの会」をやるかどうかをギリギリまで悩んだと、先生はおっしゃっていました。せっかく練習したのだから、前から決っていたのだから、そういった理由で

はなく、私はやって良かったなあと思いました。私は招待されただけです。

発表の後には、子どもたちと一緒に給食を食べました。驚くことに、一瞬ですが、私は震災のことを忘れていました。子どもたちいつものように話をしたり笑ったりしながら、給食をご馳走になりました。するとそのとき、校内放送が流れました。「牛乳が明日からありません。明日からはお茶や水などを各自水筒に入れて持ってきてください」私はハッとしました。自宅用に買った牛乳がどこにもないことに気づき、震災直後だったことを思い出したのです。そして「そうか、人が集う演劇という場合は、一瞬かもしれないけれど、心を軽くしてくれるんだ」と、その力に驚かされました。

演劇を見せるところとは、多くは劇場(ホール)だと思いがちですが、そうでない場、教室や公民館の一室、公園など、それは無数です。演劇は「見せる場」「見る場」ではなく「人が集う場」なのです。一緒に場にいること、子どもたちの姿を見て、一緒に笑い、声を掛けあうこと、それが単純に嬉しいときでした。ドーンと見えない何かの圧力に押しつぶされそうになっていましたが、子どもたちに会えたことで、ずっと心が救われ、生きる力が湧いてきました。牛乳をきっかけに、演劇にはこんな風に力を与えてくれるものなのだ、あらためて強く感じました。

学習活動に活かす演劇はとても意味のあることです。しかしそうでない面、エンターテインメントとしての演劇もその1つの側面です。ですが、この「エンターテインメント」というのが曲者で、どうしても、大きな声で、表現豊かに、気持ちを込めて、みたいなことになってしまいがちです。特に小学校で演劇を行おうとすると、どうしてもそのことに目を奪われてしまう傾向があります。

学校での「演劇」には様々な意見があると思います。演劇は万能ではありません。でも、必要とされる時、必要とされる場所、必要とされる人たちにとっては、言葉で語るより数倍の力を与えてくれることがあります。プロのつくった素晴らしい演劇が必要なことももちろんあるでしょう。でも、子どもたちがつくった演劇を地域の人々に見てもらうことも重要です。なぜなら、演劇は観ている側にだけでなく、演劇をやっている子どもたちにも力を与えてくれるからです。震災直後の中町小学校でそのことを胸に刻みました。演劇は地域にとって必要です。そういう演劇を私や劇場が、学校や先生に伝えていかなければならないのです。

中町小学校の学習発表会に想う

“本物”をめざして

稲葉 実（世田谷区立中町小学校 校長）

学習発表会のよさを尊重する

—— 学習発表会というものはどのようなものですか？

稲葉 ご承知かもしれませんが、伝統的には「学芸会」という名称を使ってきました。ところが、一時の「ゆとり教育」といった潮流が全国的にあって、時間数、授業数などがどんどん減ってくると、そういう中では、学芸会の練習やらに時間をかけていられない現状がでてきました。実のところ、学芸会というのは、先生にとって非常に負担が大きいんです。衣装を作ったり大道具を作ったり、照明を使ったりというようなこともすべて先生が手をかけます。ですから、なるべくその負担を軽減しようと考えられたのが、「学習発表会」というものです。あまり手をかけないという、いわば合理的発想に基づくもの、といってもいいかもしれません。

同じように、その経緯に似ているものが、「運動会」です。組み体操をやったり、それからダンスをやったり、

いろいろと種目はありますが、それもやっぱり相当に時間がかかるものです。それでは大変だということで、今は運動会というものが単なる記録会的なものに変容していく傾向も見られました。全部ゆとり教育の中の時間数軽減、土曜日、日曜日を休みにして、学校5日制への対応として、行事をどう精選するかという模索の中から出てきた発想といえます。そういう意味では、学習発表会の誕生は苦肉の策と言えなくもない。

ですが、手前味噌で言うのもなんなんです、この中町小学校の「学習発表会」というのは“本物”なんです。そう私は常日頃から思っています。共に「学習発表会」をみている世田谷パブリックシアターのみなさんがやっているのを見て、余計にそのように感じています。

実は最近の傾向として、親はやっぱり学芸会的なものを求めるようになってきました。運動会にしても、組み体操とか、手間暇かけてつくりあげるようなものを求めるようになってきました。「学習発表会」だって、そもそもは「学芸会」よりも時間をかけないようにしようというものだったのに、今はその反動のように、“時間をかけた学芸会”

にしようとう希望があふれています。親も先生も本格的にしたいと思うようになったようです。ただし、「学習発表会」という名前はとらないでくれ」と私は言っています。「学習発表会」にはそのよさがあって、それをつぶしてはいけないと思うからです。年に1回やる大イベントであって、日常の授業を見せるというような学習発表会ではないということ強調して、しっかりと準備して、その成果を出したいという意識は持って取り組んでいます。

—— 私たちには保護者の声というものがなかなか伝わってきません。どのような反応があるのでしょうか？

稲葉 保護者はどうしても、我が子の学年の演技に注目しますから、他の学年の演技にまではなかなかコメントしてくれません。相対的にどうなんだろということとはわかりづらいですね。保護者の見物方法というのは、その学年の演技のときはその学年の親が前のほうに陣取って観るんですが、その演技が終わるとスーッと引いていくんです（笑）。周囲への遠慮があるんで見事に入れ変わっちゃうんです。だから、最初から最後まで、1年から6年までの演技をトータルにじっくりと観てくれるっていうお客さんは見当たらないです。ですから、保護者の声というものは、総合的な判断と思ってはいけません。

私の感想になりますが、世田谷パブリックシアターにたずさわっていただいている3年生の演技は、私は“本物”だと思っています。まず、けれん味がない。これが一番の特徴です。子どもたちの内面にある特色を自然に出させてあげるといえる、そういうものが観て取れます。だからとても生き生きとしていますね。3年生は主体的に、そして意欲的に動いている気がします。それがとてもよくわかりますね。

高学年のほうは、子どもたち一人一人の意欲の喚起ということが難しい。それなりに形はつくっているんだけど、やはり見栄えとかを働かせてしまうでしょう。もちろん、

そういうよさもあるんだけどね。

テレビドラマを観ていても、唐突に発せられたアドリブのセリフに反応して、相対している役者さんが思わず素になって自然な表情を見せるということってありますよね。やっぱり、つくられた演技と、自然に出てきた表情というのは、素人でもわかることがありますね。それは3年生の子どもたちにもあるんです。とってもしこちないんだけど、それが妙にいいんですね。つくっていない本物の良さに他なりません。

—— 私たちが3年間お手伝いしてきたのが今の3年生ですが、他のクラスとちょっと異なっているというようなことはありますか？

稲葉 あの子たちは反応がいいのね。先生の言葉に対して、その反応が返ってくるものが早い。自然に出てきていて、意外に鋭い。それを感じましたね。ただ、すごく喧嘩も多い。でもそれはまさに3年生らしいというか、素直に自分を出してぶつかり合っているということであって、私はあの3年生のやんちゃぶりはすごく健全だと思っています。健全なトラブル。だから、そのうち自分たちの力で調整していってくれて高学年になると思います。私の経験から言うと、とってもしいクラスになるパターンだと確信しています。あのような我を出さないと駄目なんです。あの出し方は決して不健全じゃありません。潜在的な可能性とか、そういうものを持っている子どもたちが多いんじゃないかな。すごく期待しています。

—— 実は私たちもまさに同じことを感じまして、先日久しぶりに3年生に会ったときに、“いい感じで悪くなっている”と感じたんです（笑）。

稲葉 それっていい表現ですね（笑）。私はやんちゃ坊主たちが朝から校庭で大はしゃぎするのが大好きでね、朝な

んでわずか5分ぐらいの時間しかないんですよ、それなのに必ず外に遊びに行く。どんなに寒い日でもそうなんです。ああいうところはとってもいいですね。

外部とのつながりを大切にす

—— 世田谷パブリックシアター以外に外部との交流というものはあるのでしょうか？

稲葉 中町小学校では、いろいろな外部の関係諸機関の方たちの力をお借りしています。その方々をゲストティーチャーという名目でお招きしています。最近では近隣の民間企業の方々がすごく熱心に来ています。例えば、ゼネラル・エレクトリック（GE）さんには年に1回必ず来ていただいています。これも面白いプロジェクトなんです。30人ぐらいの社員がやって来て、朝から丸々一日子どもたちに付き合ってくれるのです。その年によって取り組みは違うんだけど、例えば子どもたちと街に出て行って、その街の課題を探すんです。道が狭いとか、ゴミの収集がどうのこうのとか、ある課題を発見してループごとに討議をして、どうやって改善していくかということを大人が手伝いながら最後にプレゼンテーションをするといったものです。とっても面白いですよ。企業色はまったくありません。GEさんはGEさんで、子どもたちに接して、子どもたちの柔らかい発想を逆にもらうというようなことを思っているようです。まさにギブアンドテイクの関係とっていいのではないのでしょうか（笑）。

さまざまな団体やら個人の方がいらして、子どもたちの授業に関わっていただいています。でも大体は一過性のもので、継続的にやってくださるということはなかなかありません。でもたった1回の授業であっても、子どもたちの心に火をつけてくれればいいと思っています。やってみると実はそういう子どもが必ず1人や2人は出ているんです。きっといろいろな子どもたちに、いろいろなかたちで、そ

れがいつか見えてくる。教育ってね、すぐに見えなくてもそういうところの面白さがあります。またそれは逆に怖さみたいなものでもあるんですが。あの一言を覚えていたとかね、あの体験を覚えていたんだとかっていうことが、いつか生きてくるということがあると思つづく思います。だから私はやっぱりいろんな経験をさせてあげたいんです。ジャンルにこだわらず、出来る限りのことをしてあげたい。いろいろな交わりを子どもたちにさせてあげようと思っているんです。

先生たちには本当に申し訳ないんですよ。「校長はみんな引き受けちゃうからな」って言っているでしょうね（笑）。いろいろなチャンスに恵まれているんですから有難いことです。本当は継続的に、子どもの成長とともに、関わってくださるのが一番ありがたいと思うんですけどね、なかなかそんな贅沢も言っていられないのでね（笑）。

—— 私たちも継続的にかかわりたく思っています。6年間続けてやったという経験はないので、ぜひかかわってみたいと思うのですが……。「演劇」って慣れてくれば、いろいろな可能性を秘めていると思っっているんですけど……。いかがですか？

稲葉 演劇の世界って、すごく奥深いじゃないですか。だから一過性じゃなくて、継続的に関わってくださり、その奥深さを子どもたちに染み込ませていくということは大切なことだと思っています。

—— 先生のお考えになる、演劇の持つ奥深さというのはどのようなことでしょうか？

稲葉 素人の私が言うのも変ですが、人生そのものが、まさに演じているようなものじゃないのでしょうか。自分が書いた脚本で、自分の設定した舞台上、毎日毎日自分が主役で舞台に立ち続けている、演技し続けているのです。そう思っていますよ（笑）。演劇って具体的に言葉で説明でき

ないぐらい多様で豊かな人生そのものです。

「コミュニケーション能力」という言葉

—— 私たちが劇場を離れ小学校に呼ばれる。もちろん演劇のワークショップをクラスでやることをのぞまれて来るのですが、その学校側の理由づけとして、いつも「コミュニケーションの情操」とか「表現力を養う」といったキーワードが並びます。本音を言うと、これには困っているのですが、いかがでしょうか？

稲葉 本当におっしゃる通りで、このことをただ表面的に捉えてはいけない。言葉を大切にするというのはいろんなやり方があると思うんだけど、私は、言葉の限界を知ることだと思っています。きれいな言葉とか正しい言葉とかって言うけど、子どもたちによく言うんですが、もし、あなたが冬の日が短くなった時に、お母さんに何の連絡もしないでお友達の家で遊び呆けていて、夜遅くに家へ戻ったとします。門限は四時なんだけれども、だいぶ遅くにね。そのときにお母さんが玄関に出てきて、「バカ！」って言ったら、それは「バカ」っていう言葉は言っちゃいけない言葉なの？ それはきれいな言葉じゃないかもしれんだけど、そこにどれだけお母さんの気持ちが表れていると思いますか。だから、どうもそういうところで、結局言葉を大事にしようというのが、何か絵に描いた餅と言ったらいいか、空虚な世界で、何かそう言っておけばいい、ではいけないと思うんですね。私も嫌なんです。だから今おっしゃったように、「演劇」とかっていうと、“コミュニケーション能力を高めるために”とかっていう、何か手段として扱われるみたいな発想って、とても違和感を感じています。言葉はとても大事なんだけど、そこに気持ちとか、そういうのが乗っていなかったら空虚であって。そういうことがわかるかどうかということが実は本来大切なことだと思うんです。

ですから、「演劇」だけじゃない、いろいろゲストティー

チャーに来ていただいて、語っていただく経験の中に、何があるかを自分で感じ取れる判断の基準をつくってほしいと願うんです。

—— 私たちが実際に行うワークショップを見て、ちょっとこれは違ったなとか、こういうものだったのかという新しい発見というようなことはございますか？

「演劇ワークショップ」は、子どもたちが自主的にまた自発的にやるということを導いています。そのやり方自体は、大きくそれぞれ学校ごとクラスごとに違えて行っています。想像していたものとだいぶ違ったというようなことがあったら教えてください。

稲葉 世田谷パブリックシアターは継続的に子どもに関わってくださろうとしているから、要するに本物というのかな、演劇を通して教育をしようとしているというのではなく、演劇を通して子供を育てようとしているといたらいいのかしら。だから先ほども申しましたが、“けれん味がない”というか、形をつくることを目的としていないというのか、そういう感じが特にします。子どもたちに自分を表現をさせて、成長してってほしいなという願いを持ちながら継続的にやっていらっしゃるという姿に映っています。本物の関わり方をしてきているなという感じがしていて、とても嬉しいです。

いろんな考え方があるんだけど、エデュケーションという言葉は、ラテン語から来るところの「引き出す」という概念であって、教え込むんじゃないと思っています。形をつくっていくものじゃなくて、本来持っているものを引き出すというのが教育の原理だと思っています。教育の現場では、実はどうしても教え込む、系統主義みたいなところも半分あって、いつも振り子のように振れているのが現実の教育の世界です。でもね、とことん系統主義、教え込みをやってみればわかるんですが、実は教え込みはできないってことがわかるんです。ところが、保護者としてみれば、錯覚と言うと言い過ぎだけど、宿題をたく

さん出してもらえば、何か勉強しているみたいな安心感が得られるんじゃないですか。たくさん時間があれば学力はつくみたいなね、妄想とまでは言わないけど、それは基本的には違う。子どもが興味や関心、子どもたちの意欲を引き出さないで、学力が身に付くはずはありません。このことって本当は誰でも分かっているはずなんだけどね。嫌々1時間や2時間勉強したって、まず学力がつくはずがありませんよね。

中町小学校の学習発表会の魅力

—— あらためて、中町小学校の学習発表会の魅力というか、こういうところが特徴だとか、こういうところを大事にしているというようなことはありますか？

稲葉 それは世田谷パブリックシアターのみなさんのパワーに圧倒されているところもあると思いますが（笑）、ひとつには中町小学校の先生たちは学習発表会を命懸けでやっています。その意気込みたるやすごいです。そしてその熱意を感じている保護者がまたいて、よっぽど子どもたちより保護者の方が楽しみにしているんです。そういう手ごたえあり、先生は励みになってまた頑張っているのです。イキイキとした内容のことを披露すれば、その反響が即返ってくるでしょう。それはやっぱり先生にとって一番の励みですからね。

当然、子どもたちがそれに乗っかっていて、いいムードができています。こちらから、煽っているなんてことはありませんが、学年ごとにライバル意識を燃やして頑張っているんです。それは真剣な表れですね。先生同士もまったく違ったアプローチでそれにのぞんでいるので、そういう多様なところもいいかもしれませんね。ひとつじゃなくて、多様な価値観がぶつかり合いながらも、アンバランスなバランスを保っているみたいなね。一見違うものが、異質なものがあんだけど、何となく、アンバランスなバランス

という言い方が私はとても好きなんですけど、中町ではそういうことがあるかなという気はします。そして、家族的なところ、アットホームなところが中町の魅力です。この校舎のつくりをみてもそうでしょう。壁がない。そういう環境もひとつの家族みたいな雰囲気を醸し出していると思います。

—— 私たちも学校に来るたびに、徐々にゲストではなくなっている感じがしていて、いい意味で、作品づくりに向かっていけるということはありません。徐々に一緒につくっているという感じが出てきています。それは私たちの目指しているところと同じかなとも思うのです。保護者は何に共感していますか？

稲葉 やっぱり子供が一生懸命やっている姿ですね。手を抜くとか、学芸会なんか本当は照れちゃって、ろくに台詞なんかも言えなかったりするでしょう。高学年になると、例えば運動会なんかでも、中学生とかになると、100メートル走なんてわざと力を抜いて走ったりするようなこともあります。中町の子どもたちは、なんでも一生懸命やっています。そういう姿っていうのが、たぶん保護者には一番伝わっていると思うんですよ。どの子も一生懸命やっているということが共感持てるんだと思います。出来不出来みたいなことよりも、夢中で取り組んでいるという姿を見せられていることは、学校としても嬉しいことです。

—— 主役である子どもたちは何を一番楽しんでいるのでしょうか？

稲葉 お父さん、お母さんが観に来てくれるということでしょうかね。そういうところもたぶんに低学年の子どもたちにはあるでしょうね。でも何でしょうね、ちょっと宿題にさせてください（笑）。

学習発表会のプログラムですが、金曜日が児童への発表会、翌土曜日が保護者への発表会なんです。保護者発表

会の挨拶のときに決まって私がよく言うことなんですけど、「今年も昨日の児童発表の日に、私は1年生に注目しました」って言うんです。「1年生の演技もそうなんですけど、1年生の鑑賞態度で今年は成功かどうかかわかります」ってね。

1年生は真剣だもんね、じーっと見ていて。それからやるときには完全に演劇の世界に自分自身が入り込んで入っている姿がよく見えるんです。だから、観るほうの1年生もかわいくて立派なんですけど、そうなるとうれもたぶんいいだろうと思ってね。低学年の子どもたちがそうやって他の学年のお兄ちゃんたちの演技を見るのを楽しみにしているというのがいいなと思ってね。

家族的雰囲気っていうふうに先ほど言いましたが、何かやっぱり一体感があるというかね、演じている者とそれを観る者との一体感というのが。だから観る者の見方で、演じている者って頑張っちゃうでしょ。そういう相乗効果みたいなのが。お父さんお母さんもすごく見方があったかいからね。

私の中町小学校に赴任してきて、まず学習発表会の前に運動会があったんです。そのとき、この学校は温かいなと思いました。お父さんお母さんたちの雰囲気がいい。ちょっとした子供の失敗なんかも温かく包んでくれちゃうみたいだね。少し遅い子がいても、その子を包んでくれちゃうような応援の仕方みたいなものがある。

—— 実は、先生方と保護者と地域が、みんな夢中になっているということが浮かび上がってくるんですね。なかなかそういう夢中になるという状況というのは、他の学校では見受けられないのですが。

稲葉 それはひとつのこの学校の伝統、文化になっているかもしれないですね。先生たちも、地域や外部の関係諸機関との交流という意識がとでもあるから、すごくその労を惜しまずに、いろんな関係を新しく結ぼうとしているとし

ていますね。

むしろ外に開いていっていることによって、出来ている空気ってあるのかなとも思います。例えば、うちは転校生の受け入れがとてもいいんですよ。すぐに解け込んでいくというか、大事にしてあげる。とても転校生を楽しみにしている。そしてすぐに解け込んでいけるというのも特徴ですね。そういうのは長い時間の中で醸成されてくる空気感というか、学校のもっている体質というものでしょうね。いろいろなどころにも行くし、いろいろなどころから来てもらえる。血の通ったと言ったらいいのでしょうか、つながっている感覚みたいなことを大切にしています。それを学校全体で共通理解しているんですよ。それは長い間につくりあげてきた中町の特徴なんでしょうね。やっぱり本物、ちゃんとやってくれる本物のコラボレーションというか本物の協力者をちゃんと選んでいるという自負心もありますから。

世田谷パブリックシアターと協働できて、本物が出来上がっていると思います。ありがとうございます。

—— 貴重な体験をさせていただきました。こちらこそ本当にありがとうございます。

2012年3月2日（世田谷区立中町小学校にて）

おわりのことば

なぜ私たちは学校に行くのか

編集部

これまで中町小学校の「学習発表会」を概括してきました。宮先生(当時)が偶然のように世田谷パブリックシアターのワークショップを参観し、私たちのワークショップに共感していただいたところから、劇場と中町小学校との親密なお付き合いははじまりました。先生の「生きる力」を育むための一連の授業への協力として「学習発表会」に参画するようになり、おかげさまで、その時間的経緯は4年に及ぶようになりました。いまでは、中町小学校からの要請というよりは、劇場の方から“行かさせていただいている”というように変わっています。私たちにとりましては、「学習発表会」は、劇場と学校との関係性のあるべき姿を考える場として活用させていただいております。

どうして中町小学校に行きたいの？

何が魅力なの？

私たちにとって、それにはどんな意味があるの？

そのような事柄を背景としながら、世田谷パブリックシアターの担当者中村麻美、田幡裕亮、進行役のすずきこ一た、

が育っていく。そういうプロセスを経ていくものだと思います。中町小学校では、そんな“場”がくれたように思います。

また、「学び合う」ことって大人も子どもも、その区別はないと思うのです。「学習発表会」に向けて作業している様子を見ると、子ども、先生、進行役、劇場スタッフみんなが、ひとつのことを体験し、そこで共に学び合っていたように思うのです。それこそが、文字通り「学び合う」ことであり、そのことに参加者全体の喜びがあったと感じています。

田幡 「学習発表会」とは世田谷パブリックシアターの「地域の物語」、そのものです。学校に取材に出かけて、子どもたちと何ができるのかを共に考え、そして目標である発表会に向けて活動する。それこそ、世田谷パブリックシアターのワークショップ「地域の物語」の小学校編に他なりません。

こ一た 「学習発表会」は文字通り学習したことを発表する場です。私の仕事は、子どもたちが演劇を使って学習できる場をつくることだと思っています。子どもたちは、演劇をつくっていく過程でいろいろなことを考えます。頭だけでなく、からだも使いながら考えます。それを「勉強させられている」という感覚でなく、楽しみながら知らず知らずに「学習している」のです。発表会という場は一つの目標ですが、それで終わってしまうのではなく、その後も学習したことは忘れないでしょう。子どもたちは、単なる思い出ではなくその後の学習・生活に役立つものを獲得しているのです。

私自身、学習会での「喜び」を意識したことはありませんが、あえて言うならそこで感じる喜びとは、おそらく先生方が自身で感じているのと同じような、子どもたちの成長かもしれません。

◎あなたにとって、学校で「学習発表会」を一緒につくるということは、一体どういうことですか？

中村 私が思っている「演劇ワークショップ」そのものを体現することだと思います。演劇は、自分たちが考え、感じたことを誰かに伝えるための一つの道具であり、よりよく生きていくための糧であると考えています。それは、誰にでも使える道具であり、誰にでも必要な糧でもあります。でも、それは即席でできるものではありません。自分たちが何をどう考え、そして感じているのかを丁寧に耕さなければならぬ。また、自分で耕した土に適切な種をまき、きちんと水を与え、じっと待つこともしなければならぬ。この作業を意識的に丁寧にやっていくのがワークショップだと思っています。そういう意味において、学習発表会に向けての過程はまさに「演劇ワークショップ」そのものだと思うのです。

田幡 「学習発表会」をやるということは、子どもたちを知ることであり、学校を知ることであり、学校のある地域、つまりは世田谷を知ることであります。

実際の子どもたちと対面し、どんな子どもがいて、今、何に興味を持つのか、彼らにとって何が重要で、何が提供できるのか、劇場の中において想像しているだけではわからないことがたくさんあり、そのことを肌身で感じるようになりました。

こ一た ひとつには子どもたちと一緒に学習し、楽しんで演劇をつくることです。私も楽しいし、子どもたちも楽しい、かつ、そこでは学習することも忘れない。子どもたちと一緒に成長していくということです。何が出来たから、何を覚えたから成長した、とは簡単に言えるものではありません。子どもたちは毎日少しずつ成長しているわけですし、今この瞬間に成長した！とはとても言いにくいものです。しかし演劇は具体的な成果が目に見えるものです。

それを成長と呼べるかどうかは分かりませんが、学習したことを発表するというのは成長のひとつの証です。

もうひとつは、演劇や演劇的手法を子どもたちや学校に届けると言うことが私の仕事だと思っています。多くの先生方は演劇に触れる機会など少ないにもかかわらず、「学習発表会」のような場を与えられ、そこで演劇なるものをつくらざるを得ない状況にいます。先生方としては、自分の子どもとのときの経験やら、同僚・先輩などからのアドバイス、他の学校や一般の劇団・劇場での公演を観るなどして、それらを参考にしながら、懸命に演劇をつくっています。いつの間にか、「学校演劇」のような特殊な演劇が出来てしまっていることも多く、その善し悪しを検証することなく今日に至っているのが現状です。私たちのような演劇のつくり方が唯一無二の方法だとは思いますが、常日頃より、演劇を使う方法の選択肢をもっともっと広げたい、演劇をさらに身近なものにしたいと思っています。ですから、実際に先生方に見てもらったり、子どもたちに体験してもらったりする良い機会を得られたと思っています。

◎4年間やってみて、何が生まれたと思いますか？

中村 4年間やってみて「生まれた」というよりも、自分、学校、劇場の間の垣根が「無くなった」ように思います。年数を重ねるごとに、それぞれの垣根を意識しないようになっていきます。それが生まれた結果だと思っています。そこでは、自分、学校、劇場の関係性が生じ、同じ目的に向かう同志としての連帯感のようなものが生まれていったような気がします。それぞれがそもそも抱いていた目的を超えた「何か」に向けて一緒に歩めるようになっていったことは大きいと思います。

田幡 人に対する信頼感でしょうか、それが生まれたのは確かです。「彼らなら大丈夫」とか「あの先生なら……」「あ

の校長なら……」といった具合にお互いを尊重するようになりました。

こ一た 私と子どもたち、そして、学校が近くなったように思います。

「私＝演劇・劇場」という認識があると思うので、そのことって、もしかしたら演劇が近くなったと言えるのかもかもしれません。演劇って、まだまだ音楽や美術といったものより距離があると思いますが、少しでも近づくことで演劇を活用できる可能性が増えたと思っています。

また、希望の域を出ませんが、将来的に劇場が身近になると人が集いやすくなり、集いやすい広場になれば、間違いなく地域が豊かになっていくと思うのです。演劇に限らず、音楽発表や展覧会などは、家族や地域の人にとっても楽しみなものです。演劇をつくる場だけでなく発表の場として、人が集う場所として劇場や演劇が活用されていくのは、少し大げさかもしれませんが、3.11の震災後の日本にとってはとても重要なことだと思います。その最初の一步、または二・三步になったと思っています。

◎学校に行く（劇場から学校へ）ということは、ずばり、どういうことですか？

中村 私たちが学校に行くということは、大げさに言うと、“既存の学校という枠組”を壊しに行くことだと思っています。決して、学校という枠組に取り込まれることなく、「こうあるべき」「こうあって当然」という固定観念を壊して、その場にいる子どもたちにしかできないもの、その場でしかできないものをつくり上げに行くことだと思っています。

田幡 劇場が学校に近づくということです。私たちは学校からの依頼を受けて「行かせてもらっている」面があります。学校は、依頼という形で最初の一步は劇場に近づいて

いるのですが、考え方や方法論といったものでは、まだまだ劇場に近づいてはいません。結局のところ、授業という枠組みでは、劇場側が学校に近づいていくしかないのです。学校は、世田谷パブリックシアターという劇場と対比するにはあまりにも大きな組織であるため、全体が変化することはまずありえないでしょう。しかし、「学習発表会」に向けて共に活動していくことで、関わったすべての人々は、間違いなく劇場に近づいていっていると思っています。そう信じたいです。

こ一た これは私たちが今一番考えなくてはならない問題です。「どういうことか」というのを「楽しいから」「表現豊かになるから」「コミュニケーションが取れるようになるから」とだけ捉えるのは良くない私は思います。私は、演劇は「生きていること」そのものだと思うことがあります。生活科は「見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして直接働きかける学習活動で、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの方法によって表現する学習活動」と文科省は説明しています。これは演劇をつくる過程であり、発表することであり、生きる力を得ることです。とするならば、劇場が学校に行くということは、子どもたちが「生きる力をつけていく手助けをする」ということになります。だから私は劇場がもっと学校に行くべきだと思っています。

しかし何でもかんでも行けば良いとも思っていません。演劇に限らず、アーティストと呼ばれる人などが学校で普段行っていない活動を試みると「化学反応が起こった」みたいなことを良く言われます。これは良い面としてひとつ取り上げて良いでしょう。しかし学校の、それも授業の中で行っているのです、短期間しか付き合うことの出来ない私たちには負えない責任を先生に任せてしまっています。それは1年間、もっと言えば学校の卒業、その後の進路を考える時まで負わなくてはならないものです。なので、劇場と学校は信頼しあえるパートナーである必要があります。

お客様という意識は捨てるべきだと思っています。演劇ワークショップなどは特に、パンドラの箱を開けるというか、抱えていることを解放してしまう場合がときとしてあります。開けてしまった後どこに向かうのか、開けるべきなのか否か、そういった事を見極めることは教員だけでなく、劇場も一緒に考えるべきです。その子どもたちの成長に関わることですから……。

極論を言えば、私は私や世田谷パブリックシアターの進行役たちが学校に行くことはとても良いことだと思っています。しかし、それはその人を信頼して「良い」と言っているのであって、単に「劇場だから良い」「演劇だから良い」と言っているわけではありません。実はそこが私たちの活動を広めていく上でのネックになっています。「良い」ようになるのは、論理立てて、研修を受ければ良いかといえことではありません。だとしたら「信頼して良く」なるためにはどうすれば良いのでしょうか？ 新しく進行役になろうとしている人たちや、学校に行こうとする劇場だけが考えるのではなく、次の世代に伝えていく私たちも考えなくてはならないことなのです。

◎何で学校に行きたいか？

中村 より多くの子どもに出会いたいから。そして、より多くの子どもに出会うことで、今当然のこととして存在しているものを壊して、自分たちにしかできない枠組みをつくりあげて、自分たちのいる学校、まち、社会に風穴を開けていってほしいと思うから。そして、そう願う私の仲間をつくりたいからです。

田幡 「劇場が素敵な場所である」と思ってもらいたいからです。

こ一た 自分で言うのも恥ずかしいのですが、私たちのいまやっているものは、もし自分が子どもだったなら受けて

みたかった授業だと思うからです。私は私の授業を受けたいです。そのことって、自分ではかないませんが、多くの子どもたちに経験して欲しいと考えているからです。それはなぜか。演劇が楽しく学習できる道具だからです。

◎私たちは学校でこれまで何をしてきたと言えるでしょうか？

中村 ずばり演劇をやってきたということだと思います。共に学び合い、想像（創造）し、伝え合う場をつくることが演劇だと思っています。そのような場を学校でつくってきました。

田幡 一定の授業の枠に対して、単に事業を提供するだけでなく、当事者として学習してきました。学習発表会当日まで、ワークショップで訪問している時期は、我々にとっての「生活科」を受講してきたのだと思います。

こ一た 演劇を学習のひとつの方法として提示してきたと言えます。

演劇を体験した子ども、しなかった子ども、例えば、同じ子どもは、ふたりはいないのでそれを比べることはできませんが、相談することがうまくなっていった、表現することがうまくなっていった、見たり聞いたりすることができるようになった、伝えるためには考える必要があると認識した、考えることがうまくなった 等々、演劇を通じて得たものは計り知れなく多かったと思うのです。その方法を先生や学校、そして子どもたちに伝えることができたと思います。

◎今後、学校の中で、どういうことをやっていきたいですか？

中村 私たちは授業という制約のある時間の中で活動しています。そのことは、劇場というホームで自分たちのつくったルールにのっとって演劇をつくるよりも、不自由なこと

であるかもしれません。でも、私たちは自分たちのルールの中にとどまらない何かを目指して活動をしています。そのルールを打ち破った先で出会える人・ことに出会いたいのだと思います。だからこれからも、既存のルール、枠組みにとらわれることなく、その場、その人たちとしかできない演劇をつくっていきたいと思います。

田幡 私にとって、「新しい発見があること」を学校でやっていきたいです。子どもたちに日々発見があるように、大人である私、我々劇場のスタッフにも発見がなければなりません。そうしないと、子どもたちのためにもなりません。

こ一た 「セリフを覚える」「大きな声で話す」「全身を使って豊かに表現をする」といったような一見演劇しているようなことはやめ、子どもたちが主体的に演劇つくる場をつくりたい。そこから学ぶべきことは多いからです。もちろん学習したことを演劇にすることはやりたいことの筆頭ですが、実生活に関係のないお話も演劇でやりたいです。架空の話でも主体的につくるチャンスを子どもたちに与えると、そこから学習することは多いからです。

.....

中村麻美(世田谷パブリックシアター 劇場部 教育開発課)

田幡裕亮(世田谷パブリックシアター 劇場部 教育開発課)

すずきこ一た

俳優、ワークショップ・ファシリテーター。企業組合演劇デザインギルド理事。劇場や教育現場での演劇創作の他、在日外国人との演劇創作、日常や社会の問題を演劇で考えるフォーラムシアターを作るなど、多岐にわたり活動中。世田谷パブリックシアターでは、「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」「地域の物語」「デイ・イン・ザ・シアター」「小学生のためのワークショップ」等を進行している。演劇デザインギルド <http://www.edg.or.jp/>

資料編



世田谷パブリックシアター 2011年度 ワークショップ事業の記録

世田谷パブリックシアターのワークショップを中心とした教育普及事業は、

＜劇場の中、稽古場などを利用して行っているもの＞と、

＜劇場の外、学校で行っているもの－「世田谷パブリックシアター@スクール」事業＞との2つ

に大きく分かれます。

「演劇」や「劇場」はその発生以来、ずっと人々の身近にある存在でした。

でも今の日本でのそれらは、ちょっと敷居が高くて、普段の生活からは遠い存在になってしまっ

ています。

だからこそ、地域の公共劇場である世田谷パブリックシアターは、

さまざまな人の手に届くようにさまざまな場所でワークショップを行い、

演劇を手渡していきたいと思っています。

演劇が好きの人にも興味がない人にも、

劇場のことを知っている人にも知らない人にも、

劇場の近くの人にも遠い人にも、

みんなにとっていつでもいつまでも開かれた劇場であるために、

今日も私たちはワークショップを行っています。

コミュニティ・ワークショップ事業

デイ・イン・ザ・シアター

演劇にちょっと触れてみたい! という方や、稽古場に入ってみたい! という方、そして仕事帰りや休日になんか面白いことないかなあ? という方、どんな方でも大歓迎。

身体を動かしたり、声を出したりするうちに、頭も心もすっきりほぐれて、日頃の生活でたまっていたあれやこれやもスッキリ解消。

演劇は見るだけじゃありません。みんなして演劇で遊んでみましょ。

デイ・イン・ザ・シアターはそんなワークショップです。

(劇場ホームページ ワークショップ紹介文より)

たくさんの人に演劇や劇場に親しんでもらうため、開館以来ほぼ毎月1回行われている人気のワークショップ。間口が広く、敷居の低い入口として、お互いに知り合ったり、体を動かしたりするなかで、どなたでも遊び、楽しみながら、演劇のおもしろさや奥深さ、意義を実感してもらうことをめざしている。

日 程：平成23年

4月5日(火) 19時～21時30分 [開館14周年記念プログラム]

5月15日(日) 18時30分～21時30分

6月27日(月) 10時～12時 [モーニング・デイ]

6月27日(月) 19時30分～21時30分 [イブニング・デイ]

7月30日(土) 19時30分～21時30分 [真夏の夜の劇場]

8月23日(火) 19時30分～21時30分

9月14日(水) 19時30分～21時30分

10月21日(金) 19時30分～21時30分 [秋の夜長スペシャル]

10月22日(土) 14時～17時 [秋は夕暮スペシャル]

11月5日(土) 13時30分～17時

平成24年

2月17日(金) 19時30分～21時30分

3月12日(月) 19時30分～21時30分

参加費：1回500円

参加人数：延べ152人 / 全12回

地域の物語ワークショップ

今回設定された3コースは、そんな1960年代の記憶やモノを手がかりに、現在から過去、過去から現在への時間の旅へと出かけます。そのときどきにまつわる人々の思いや出来事、取材をした相手、自分、みんなで考えたこと、感じたことにじっくり向き合いながら、作品をつくっていきます。

みなさん、お気に入りのコースを見つけて、一緒に私たちの「地域の物語」をつくりあげていきませんか?

(ワークショップ参加者募集チラシより)

地域の公共劇場として機能していくことをめざし、「まち」を題材に行っているワークショップ。参加者がまちに出て取材を行い、人やものに出会う中で、地域について見つめ直し、それぞれの体験をもとに作品をつくりあげていく。今年は「1960年代の世田谷」をテーマに、3つのコースでワークショップを行った。

「1からコース」

日 程：平成23年

11月26日(土) 13時～17時

11月27日(日) 11時～17時

12月3日(土) 13時～17時

12月4日(日) 11時～17時

12月11日(日) 11時～17時

平成24年

1月14日(土) 13時～17時

1月15日(日) 11時～17時

1月29日(日) 11時～17時

2月12日(日) 13時～17時

2月19日(日) 13時～17時

3月3日(土) 13時～17時

3月4日(日) 11時～17時

3月17日(土) 13時～17時

3月18日(日) 11時～17時

3月23日(金) 19時30分～21時30分

3月24日(土) 11時～17時

3月25日(日)

4月15日(日)

進行役：すずきこーた(演劇デザインギルド)、吉田小夏(青六組主宰)

対象：どなたでも

参加費：5,000円

参加人数：15人

「カラダの未来」

日 程：平成24年

1月20日(金) 9時30分～12時

1月26日(木) 9時30分～12時

1月27日(金) 9時30分～12時

2月10日(金) 9時30分～12時

2月23日(木) 9時30分～12時

2月24日(金) 9時30分～12時

3月2日(金) 9時30分～12時

3月15日(木) 9時30分～12時

3月16日(金) 9時30分～12時

3月23日(金) 9時30分～12時

3月24日(土) 9時30分～12時

3月25日(日)

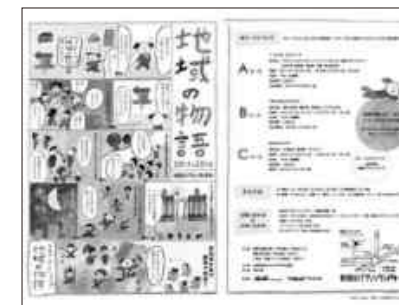
4月15日(日)

進行役：山田珠実

対象：どなたでも

参加費：3,000円

参加人数：10人



<p>「1964 消えた○△□」</p>
日　程：平成 24 年
1 月 21 日（土）13 時～17 時
1 月 28 日（土）13 時～17 時
2 月 4 日（土）13 時～17 時
2 月 11 日（土）13 時～17 時
2 月 18 日（土）13 時～17 時
2 月 25 日（土）13 時～17 時
2 月 26 日（日）13 時～17 時
3 月 10 日（土）13 時～17 時
3 月 11 日（日）13 時～17 時
3 月 17 日（土）13 時～17 時
3 月 18 日（日）13 時～17 時
3 月 23 日（金）19 時 30 分～21 時 30 分
3 月 24 日（土）11 時～17 時
3 月 25 日（日）
4 月 15 日（日）

進　行　役：瀬戸山美咲（ミナモザ主宰）

対　象：どなたでも

参　加　費：5,000 円

参加人数：15 人

カラダと旅するワークショップ

どこへ行くにも、何をするにも、ずっと変わらずお付き合いする自分のココロとカラダ。

でも意外に、自分のことは自分だけではわからなかったりするもの。ワクワクしたいココロを切符に、みんなでワークショップの旅に出ましよう。

一緒にするのはサーカスアーティスト、でも特訓はしません、運動経験もいりません。

そこで出会った人たちと、普段は使わないカラダとココロを使って遊んだら、帰るころにはいつもの生活が懐かしく、新しく、感じられる …… かもしれません。

（ワークショップ参加者募集チラシより）

進行役にサーカスアーティストを迎えてのワークショップ。いつもとは違った視点で自らのカラダに向き会えるような内容で、ワークショップを行った。

日　程：(1)「モノから生まれるダンス」
7 月 13 日（水）　19 時 30 分～21 時
(2)「あしなが空中散歩 in 世田谷」
7 月 30 日（土）　13 時 30 分～17 時

進　行　役：金井圭介

対　象：（1）身体を使って何かしてみたい人（どなたでも）

　　　（2）身体を使って何かしてみたい人（小学 3 年生以上）

参　加　費：(1) (2) とも 500 円

参加人数：(1) 15 人　(2) 12 人

コンテンポラリーダンスでカラダワークショップ

子育て中の人も、子育てはもう卒業した人も、ダンサーと一緒に踊りませんか。

平日午前中の 2 時間で、自分のカラダとじっくり向き合うワークショップです。

ダンス経験がなくてもだいじょうぶ。子育て経験のある方たちならではのなごやかな空気の中で、最近ちょっと使っていないカラダを伸ばして、ちぢめて、ひねって、まわして……

踊ってみたら、こころもふわっと、からっと元気になるかもしれません。（ワークショップ参加者募集チラシより）

コンテンポラリー・ダンスのダンサーを講師としたワークショップ。平日の午前中、子育て経験者に対象を限定して行った。参加者は、普段意識しない身体の声に耳を傾け、子育ての忙しさのために気付いていなかった自分たちの身体を感じ、考え、見つめなおし、意識を深める場となった。

日　程：平成 23 年 10 月 6 日（木）・20 日（木）・27 日（木）
10 時～12 時
進　行　役：山田うん
対　象：子育て中の方、もしくは子育て経験のある方
参　加　費：1,500 円
参加人数：15 人

<考えるワークショップ>

毎日、毎日私たちは何かしら食べ物を口にします。

生きるために、楽しむために・・・。

「食べる」ことは、私たちにとってあたりまえの行為です。

が、今一人一人の「食」を見直すことをせまられています。

このワークショップでは、そんなあたりまえの「食べる」ということを、カラダを通じて改めて考えてみたいと思います。

（劇場ホームページ　ワークショップ紹介文より）

演劇をつくるためのワークショップではなく、テーマについて考えることを目的としたワークショップ。今年 は 3 つのテーマについて、考えを巡らした。

「仕事」を考えるワークショップ～社会が必要としていることにお金が払われないのはなぜだろう～

日　程：平成 23 年
6 月 25 日（土）　13 時 30 分～17 時
6 月 26 日（日）　11 時～17 時
進　行　役：富永圭一（abofa）
対　象：中学生以上
参　加　費：1,000 円
参加人数：5 人

「食」を考えるワークショップ

日　程：平成 23 年 9 月 6 日（火）・13 日（火）・20 日（火）
19 時 30 分～21 時 30 分
進　行　役：大久保慎太郎
ゲ　ス　ト：黒田将嗣
対　象：中学生以上
参　加　費：1,500 円
参加人数：14 人

「小さなライフライン」を考えるワークショップ

日　程：平成 23 年
12 月 16 日（金）19 時～21 時
12 月 24 日（土）13 時～17 時　（終了後小パーティーあり）
進　行　役：柏木陽（NPO 法人演劇百貨店）
対　象：高校生以上
参　加　費：1,000 円
参加人数：13 人

狂言ワークショップ

古典芸能「狂言」の所作を体験してみませんか？
基本的なすり足や、お腹の底から湧きあがるセリフ、笑いを通して、狂言をより深く体験することができます。
講師には国内外で数多くの公演に出演されている万作の会 深田博治さん を迎えし、1 日限りの狂言体験ワークショップを実施します。
一人でも、ご家族、ご友人、会社の同僚みなさんとも構いません。是非ご参加ください。
（ワークショップ参加者募集チラシより）

狂言の所作を実際に体験するワークショップ。一日限りではあったが、様々な人に狂言を体感してもらうことができた。

日　程：平成 24 年 3 月 9 日（金）　19 時 30 分～21 時 30 分
進　行　役：深田博治（万作の会）
対　象：どなたでも
参　加　費：無料
参加人数：23 人

フォーラムシアターを試みる

70 ～ 90 年代を中心にラテンアメリカと亡命先のヨーロッパなどで広く活躍したアウグスト・ボアール（Augusto Boal）は、社会においてさまざまな抑圧を受ける人間が、自身が抱える問題を発見し表現するための方法として、“フォーラムシアター”という演劇形態を生みだしました。今回のワークショップでは、そのフォーラムシアターが今現在の日本において、どのように活用され得るのかを探ります。新しい演劇形態を模索している方、また演劇によって社会問題の解決方法を探ることに興味のある方、ぜひご参加ください。（劇場ホームページ　ワークショップ紹介文より）

先人の培った手法について、改めて検証・実践を試みた。最終日には試作品の発表も行い、今後の活動に向けて大きな示唆に富んだワークショップとなった。

日　程：平成 24 年
1 月 9 日（月）　13 時～21 時 30 分
1 月 10 日（火）　18 時～21 時 30 分
1 月 11 日（水）　18 時～21 時 30 分
1 月 12 日（木）　18 時～21 時 30 分
1 月 13 日（金）　18 時～21 時 30 分
進　行　役：花崎攝（演劇デザインギルド）、中野成樹（中野成樹＋フランケンス）
対　象：新しい演劇形態を模索している方、また社会問題の解決方法を探ることに興味のある方
参　加　費：無料
参加人数：14 人

こどものためのワークショップ

長期休み期間に合わせて実施した、小学生や中学生、高校生を対象とした演劇やダンスのワークショップ。子どものころから演劇やダンスなどの舞台芸術に触れてもらうことは、未来の演劇人を生み出すことに繋がる。なにより自分たちの身体を使って遊び、さまざまな表現に直接触れることが、子どもにとって特別な経験、幸福な体験、そして最高の思い出になればとの思いで行っている。

〈夏休みワークショップ〉

夏休みに、げきじょうで出会った新しい友だちと、からだをつかったゲームをして、いろんなものを、みたり、きいたり、さわったりして、そこからエンゲキをつくっちゃいます。みんなで、おもいっきり、遊んじゃおう!
(小学生のための遊ぶ演劇ワークショップ参加者募集チラシより)

「中学生と高校生のための演劇ワークショップ『How do you feel?』」

日 程：(1) おためし 1 日コース
平成 23 年 7 月 21 日 (木) 13 時～ 16 時
(2) つづけて 4 日コース
平成 23 年 8 月 3 日 (水) ～ 6 日 (土)
初回 13 時～ 16 時、2 回目以降 11 時～ 16 時
対 象：中学生・高校生・それぐらいの年齢の人
進 行 役：富永圭一 (abofa)
参 加 費：(1) 500 円 (2) 2,000 円
参加人数：(1) 16 人 (2) 21 人



「小学生のための遊ぶ演劇ワークショップ『しゅっぱつ!エンゲキ大冒険』」

・低学年 7 月コース
日 程：平成 23 年 7 月 22 日 (金) ～ 24 日 (土)
10 時 30 分～ 15 時 30 分
対 象：小学生 1 年生～ 3 年生
進 行 役：すずきこーた (演劇デザインギルド)、鈴木秀城
参 加 費：1,500 円
参加人数：20 人

・低学年 8 月コース
日 程：平成 23 年 8 月 18 日 (木) ～ 20 日 (土)
10 時 30 分～ 15 時 30 分
対 象：小学生 1 年生～ 3 年生
進 行 役：すずきこーた・開発彩子 (演劇デザインギルド)、大久保慎太郎
参 加 費：1,500 円
参加人数：22 人

・高学年コース
日 程：8 月 24 日 (水) ～ 26 日 (金)、28 日 (日)、
29 日 (月) 10 時 30 分～ 16 時
対 象：小学 4 ～ 6 年生
進 行 役：すずきこーた (演劇デザインギルド)、吉田小夏 (青☆組)、
大久保慎太郎
※このプログラムはプレーパークせたがやといっしょに考えました。
参 加 費：2,500 円
参加人数：14 人

・追加ワークショップ「ちよっぴりエンゲキ大冒険」
日 程：平成 23 年 8 月 8 日 (月) 10 時 30 分～ 15 時 30 分
対 象：小学 1 ～ 3 年生
進 行 役：すずきこーた、大久保慎太郎
参 加 費：500 円
参加人数：10 人

「小学生のためのダンスワークショップ『うずうずダンスワークショップ@ SePT』」

日 程：平成 23 年 8 月 1 日 (月)・2 日 (火) 13 時～ 16 時
対 象：小学 3 ～ 6 年生
進 行 役：森下真樹
参 加 費：1,000 円
参加人数：16 人

「中学生と高校生のためのダンスワークショップ『カラダと旅するワークショップ』」

日 程：平成 23 年 8 月 22 日 (月)・23 日 (火) 13 時～ 16 時
対 象：中学生・高校生・それぐらいの年齢の人
進 行 役：金井圭介
参 加 費：1,000 円
参加人数：7 人

〈冬休みワークショップ〉

みんなが劇場に集まったら、そこからもう演劇ははじまっている。きっと楽しいことが、そこかしこに見つかるかもしれない。気軽に考えず、わいわい話をしながら、みんなでパーッと遊ぼう。
(劇場ホームページ ワークショップ紹介文より)

「中学生と高校生のための演劇ワークショップ」

日 程：平成 23 年 12 月 23 日 (金)、27 日 (火)、28 日 (水)
10 時～ 16 時
対 象：中学生・高校生、それぐらいの年齢の人
進 行 役：富永圭一 (abofa)
参 加 費：1,500 円
参加人数：24 人

「中学生と高校生のためのダンスワークショップ」

日 程：平成 23 年 12 月 26 日 (月) 14 時～ 17 時
対 象：中学生・高校生、それぐらいの年齢の人
進 行 役：金井圭介
参 加 費：500 円
参加人数：17 人

「子ども演劇ワークショップ うかれお茶会にご招待」

日 程：平成 24 年 1 月 5 日 (木)、6 日 (金) 10 時～ 15 時 30 分
対 象：小学生
進 行 役：花崎攝・すずきこーた・開発彩子 (演劇デザインギルド)
参 加 費：1,500 円
参加人数：22 人

〈春休みワークショップ〉

春休みの1週間
みんなでどっぶり演劇につかろう
今年は戯曲と真っ向勝負!
でも難しく考えず
“Say Yo!” っと気軽にノリで楽しもう!
(劇場ホームページ ワークショップ紹介文より)

「中学生のための演劇ワークショップ『春の“Say Yo!”ウソツキワークショップ』」

日 程：平成 24 年 3 月 26 日 (月) ～ 4 月 1 日 (日)
10 時～ 16 時 (4 月 1 日のみ 17 時まで)
対 象：中学生
進 行 役：柏木陽 (NPO 法人演劇百貨店)
参 加 費：3,500 円
参加人数：24 人



『世田谷パブリックシアター@スクール』

よりたくさん子どもたちが、演劇やダンスと出会い、表現力・想像力やコミュニケーション能力を育んでいけるように、専門家を学校へ派遣し、ワークショップや小公演などを盛り込んだ参加型の創造活動を行なっている。また、演劇ワークショップの手法を先生方に手渡すために、先生向けのワークショップを開いている。

かなりゴキゲンなワークショップ巡回団

ワークショップ巡回団は、2003年からたくさんの小中学校で演劇ワークショップを行ってきました。学習や催し、放課後活動など、演劇ワークショップを活用する機会は、本当にたくさんあります。その力を学校で活かして欲しい、活かしていきたいと思っています。少しでも興味を持たれたら、まずは劇場にご連絡ください。

(世田谷パブリックシアター@スクール事業 紹介リーフレットより)

多種多様な学校の要望に応じて、世田谷パブリックシアターのワークショップ・ファシリテーターたちが学校を訪れ、さまざまな形で演劇の手法を通したワークショップの進行を行う。普段学校で接する大人とは一味も二味も違う大人と出会い、一緒に身体を動かし遊ぶうちに、子どもたちの心がほぐれていき、自由で豊かな発想があふれ出す場は、まさに小さな劇場である。

日　程：
平成23年
6月23日(木) 梅丘中学校 中学1年生
6月24日(金)・25日(土)・27日(月)、7月1日(金) 松原小学校 小学6年生
6月25日(土)・27日(月)・28日(火)、7月1日(金) 松原小学校 小学5年生
7月5日(火) 桜丘中学校 中学1年生
7月12日(木) 中町小学校 小学1年生
7月26日(火)・27日(水) 川崎市立中原市民館 川崎市内中学校演劇部員
9月7日(水)、10月5日(水)、11月9日(水)・16日(水)・19日(土) 笹原小学校 目の教室
10月4日(火)・11日(火)、11月7日(月)・9日(水)・11日(金)・14日(月)・15日(火)・16日(水)・18日(金) 中町小学校 小学3年生
9月21日(水)、10月26日(水) 久留米特別支援学校府中分教室 ひだまり教室
9月26日(月)、10月13日(木)・17日(月)・20日(木)・25日(火)・27日(木)、11月1日(火)・8日(火)・10日(木) 多聞小学校 小学2年生
9月26日(月)・27日(火)、10月19日(水)・20日(木) 多聞小学校 小学1年生
9月30日(金)、10月20日(木)・25日(火)・27日(木)、11月2日(水) 多聞小学校 小学6年生
9月27日(火)・30日(金) 山野小学校 小学1年生
9月30日(金)、10月7日(金) 砧中学校 中学1年生
10月13日(木)・21日(金)・27日(木)、11月11日(金)・14日(月)・21日(月)・24日(木)・25日(金) 船橋小学校 小学2年生

10月14日(金) 三軒茶屋小学校 小学4年生
10月15日(土) 三軒茶屋小学校 小学1年生
10月15日(土) 三軒茶屋小学校 小学2年生
10月18日(火) 三軒茶屋小学校 小学5年生
10月18日(火)、11月1日(火) 三軒茶屋小学校 小学6年生
10月18日(火) 三軒茶屋小学校 小学3年生
10月18日(火)・20日(木) 旭小学校 小学1年生
10月25日(火)、11月1日(火) 旭小学校 小学2年生
10月31日(月)、11月1日(火) 京西小学校 小学1年生
11月17日(木)・24日(木) 旭小学校 小学4年生
11月21日(月)・24日(木) 祖師谷小学校 ほぶら学級
12月1日(木) 代田小学校 小学2年生
12月10日(土) 中町小学校 全校生徒

平成24年

1月17日(火)・27日(金) 祖師谷小学校 小学1年生
1月17日(火)・24日(火) 旭小学校 小学3年生
1月19日(木)・26日(木) 祖師谷小学校 小学2年生
1月20日(金)・24日(火) 東大原小学校 小学1年生
1月23日(月)・30日(月) 東深沢小学校 小学2年生
1月23日(月)・30日(月) 奥沢小学校 小学2年生
1月24日(火)、3月5日(月) 奥沢小学校 小学1年生
2月7日(火)・14日(火)、3月6日(火) 三軒茶屋小学校 小学1年生
2月7日(火)・14日(火) 三軒茶屋小学校 小学2年生
2月13日(月)・17日(金) 給田小学校 小学2年生
2月13日(月)・27日(月) ほっとスクール城山 小・中学生
2月20日(月)・21日(火)・23日(木) 松原小学校 小学2年生
2月20日(月)・21日(火)・28日(火)・29日(水)、3月12日(月) 松原小学校 小学4年生
2月21日(火)・22日(水)・23日(木)・28日(火)・29日(水) 松原小学校 小学3年生
2月22日(水) 松原小学校 小学1年生
2月21日(火)・22日(水) 塚戸小学校 小学6年生
2月27日(月)、3月5日(月)・9日(金) 中里小学校 小学1年生
2月27日(月)、3月5日(月)・9日(金) 中里小学校 小学2年生
3月1日(木) 梅丘中学校 中学2年生
3月7日(水)・8日(木) 桜町小学校 小学2年生
3月13日(火) 梅丘中学校 中学3年生

参加人数：延べ4473人 / 計127日 全23校



@スクール公演

「にんにん忍者★でんエモン一座」

@子どもたちも、いつのまにか劇の世界に入っていて、俳優たちと一緒に物語をくりひろげる!<見て・演じて・楽しむ>、世田谷オリジナルの学校公演です。

「劇世界を体験しながら、子どもたちの想像力をかきたてて、のびのびと表現するきっかけになってくれれば」という願いをこめてつくりました。学校の表現活動、クラス作りなどにぜひご活用ください。

(世田谷パブリックシアター@スクール事業 紹介リーフレットより)

世田谷パブリックシアターオリジナルの、参加型演劇公演。体育館の床で演じられることで、舞台と客席の区別もなく、子どもたちは物語の進行の中で、時に出演者として、時に観客として、まったく自然に劇の中に参加していく。

日　程：
平成23年
10月3日(月) 鳥山小学校 小学1年生
10月4日(火) 笹原小学校 小学1年生・3年生
10月5日(水) 鳥山小学校 小学1年生
10月6日(木) 砧小学校 小学1年生
10月7日(金) 砧小学校 小学3年生・5年生
10月11日(火) 東玉川小学校 小学5年生
10月12日(水) 鳥山小学校 小学1年生
10月13日(木) 若林小学校 小学2年生・3年生
10月14日(金) 東大原小学校 小学3年生
10月17日(月) 東深沢小学校 小学1年生
10月18日(火) 中里小学校 小学1年生・2年生
10月19日(水) 東深沢小学校 小学1年生
10月20日(木) 塚戸小学校 小学5年生
10月21日(金) 尾山台小学校 小学1年生
10月24日(月) 塚戸小学校 小学5年生
10月25日(火) 中里小学校 小学3年生・4年生
参加人数：延べ992人 / 全22公演

世田谷パブリックシアター@スクール×先生 2011

世田谷パブリックシアターでは、世田谷区内を中心に小学校や中学校などでの演劇ワークショップ活動を多く行っています。そういった活動の中で知ったことや感じたことについて先生がたと共有しながら、お互いのヒントになるようなワークショップを行います。からだを動かしたり、お互いにおしゃべりしたりしながら、日々の授業や学芸会・学習発表会に向けて、と一緒にヒントを探していきましょう。

(劇場ホームページ ワークショップ紹介文より)

世田谷パブリックシアターの子どもたち向け事業でワークショップを行っているファシリテーターが、先生を対象にワークショップを行い、実際に体験してもらう。話し合う時間を多く取り、先生、進行役、劇場、それぞれの立場からの意見を交換しながら、ともに考える。また、学校での取り組みについての報告会も行う。

「世田谷パブリックシアターの学習発表会事例報告」

日 時：平成23年6月24日(金) 19時から

報 告 者：すずきこーた (演劇デザインギルド)

参 加 費：無料

参加人数：10人

「先生のための演劇ワークショップ『教えるヒント』」

(1) 平成23年7月29日(金) 14時～18時

「基礎編：演劇ワークショップを体感してみる」

(2) 平成23年7月31日(日) 10時～17時

「展開編：学校の中での様々な演劇ワークショップについて」

(3) 平成23年8月27日(土) 10時～17時

「特別編：先生たちが考えた授業時間内での演劇ワークショップ」 協力：IDE

対 象：小学校・中学校・高校などの先生

進 行 役：富永圭一 (abofa)、すずきこーた (演劇デザインギルド)、
柏木陽 (NPO 法人演劇百貨店)

参 加 費：各回とも1,500円

参加人数：延べ29人 / 全3回

中学校演劇部支援

世田谷区内中学校演劇部の活動を発展・活性化することを目的とし、演劇の専門家を世田谷区立中学校6校の演劇部に派遣する。中学生による芸術活動が活発になるよう、各学校の演劇部の要望と、実際の活動の様子に応じて創作活動を中心に支援する。

対 象：弦巻中学校演劇部

進 行 役：野崎夏世、石橋和也

全19回

対 象：緑丘中学校演劇部

進 行 役：大久保慎太郎

全29回

対 象：砧中学校演劇部

進 行 役：茶円茜

全19回

対 象：三宿中学校演劇部

進 行 役：とみやまあゆみ

全36回

対 象：梅丘中学校演劇部

進 行 役：大西由紀子

全19回

対 象：世田谷中学校演劇部

進 行 役：柏木陽

全15回

SPT educational

06 中町小学校「学習発表会」の記録

- 発行日 2012年3月31日
- 発行 (公財) せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
<http://setagaya-pt.jp>
- 企画・編集 世田谷パブリックシアター 学芸
(足立 寛 + 恵志美奈子 + 奥村優子 + 九谷倫恵子 + 田幡裕亮 + 中村麻美 + 矢作勝義 + 山本大)
- 協力 すずき こーた
- イラストレーション 玉村幸子 (N/T WORKS)
- デザイン 野村 浩 (N/T WORKS)
- 印刷 株式会社リヒトプランニング

[協賛]  アサヒビール株式会社
 TORAY 東レ株式会社

禁無断転載



SPT
educational
06

発行／(公財)せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター